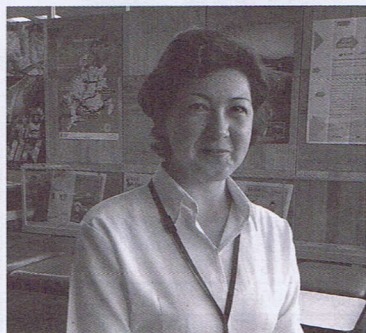


インタビュー 室伏ベニータさん（韓国／ニュージーランド）



4月から静岡市男女参画・多文化共生課で働くことになりました、室伏ベニータです。母が韓国人、父はニュージーランド人で私自身は韓国のソウルで生まれ、14歳まで暮らしました。その後、父の仕事の関係でニュージーランドに引っ越しました。韓国とニュージーランドでは環境が全く違うので、カルチャーショックがあったのではとよく聞かれますが、私達家族はソウルの外国人居住区に住んでいたため、韓国人社会の中で暮らしたという感覚はありません。また現地校ではなく、インターナショナルスクールに通っていたので、様々な国の人が集まるニュージーランドの環境に違和感はなかったです。ですので、自分にとっての故郷は、思春期に地元の学校に通ったニュージーランドと言えるかもしれません。

日本語を学ぶきっかけは、私の通っていた高校の選択科目に日本語が加わることになり、興味を持ったからです。日本に行ってみようという気持ちが高まり、交換留学制度を利用して大阪の高校に10ヶ月間留学しました。その間、3つの家庭にホームステイをしたのですが、カルチャーショックだったのは、どの家庭でも家族の中で父親が一番偉いこと！（笑）『キウイ・ハズバンド』と言われるほどニュージーランドの男性は家事を手伝うのが当たり前で、家族の中に序列がないのです。私の父もよく料理をしていたので、ホストファーザーが家事を手伝わないことにびっくりしました。あとは満員電

車！痴漢が多く最初は電車に乗るのが怖かったです。

大学卒業後、JETプログラムに応募し、国際交流員（CIR）として働くため、再来日しました。日本人と在住外国人の相互理解のため、3年勤務し、今の夫と結婚しました。日本で暮らして辛かったのは、夫が転勤族だったため定職につけなかったことと、ご近所の方と仲良くなり始めた頃、また転勤になってしまうため、なかなか友人が作れないことでした。でも一番上の子が小学生になったのを機に、夫の故郷である焼津市に家を建てました。静岡はそれまで暮らしていた大阪や埼玉とは違い、高い建物がほとんどありません。大気汚染の被害を受けていない青空が広がり、気候も穏やかで四季があるニュージーランドととても似ていると思います。

静岡県や静岡市は多文化共生社会をめざしていますが、外国人の受け入れ態勢がまだ十分とは言えないと感じます。私の役目でもありますが、目標は自分の育った環境や経験を生かし、子ども達が小さな頃から国際感覚を身につけられるような環境を作ったり、日本人と外国人との共生社会の実現に向け環境を整える様々な取り組みに携わっていくことです。



静岡市議会を訪問したアメリカ人学生に通訳をするベニータさん（写真中央）

事業報告 「平成30年度静岡市国際交流協会理事会・総会」

5月11日（金）に平成30年度静岡市国際交流協会理事会及び総会が開催されました。理事会では総会に諮る議案について出席理事全員の賛同が得られました。続く総会では、冒頭、当協会会長の田辺信宏静岡市長から、「異なる文化や価値観を理解し合うことが大事で、国際交流協会には国際感覚を持った市民が増えるように、その役割を期待したい」とのあいさつがなされました。その後、議案の審議が行われ、平成29年度事業報告及び収支決算報告、経営計画、平成30年度事業計画及び収支予算案、規約の一部改正及び静岡市国際交流協会の法人化など8議案が原案通り議決されました。なお、繰越金がゼロとなっている理由と募金についての質問があり、市からの補助金を返納することにより、収入と支出を相殺し、繰越金がゼロとなるようにしていること、基金については、当協会の前身の静岡商工会議所時代（静岡都市提携協会）が持っていた資金を旧静岡市国際交流協会の設立に合わせ、基金として移行したものである旨の回答をいたしました。

総会終了後に、元ACミランのメディカルトレーナーの遠藤友則さんを講師に迎え、「異文化への挑戦～ミラノに暮らして～」と題した講演会を行いました。遠藤さんは東洋人でありながら、欧州のクラブでプロとして成功を収めることができた秘訣として「西洋人にはない自分の長所を見つけたこと、スター選手でも無名の選手でも序列をつけずに接したこと」とし、周りの信頼を少しずつ得て、不動のメディカルトレーナーとしての地位を確立させたことを、時折笑いも交えながら温かな雰囲気でお話いただきました。

